NY エッセイ ⑲

中瀬 有紀



3台のストロボのみを使用して撮影しました。ISO 100, Shutter Speed 1/200, Aperture Value 20.0, using Canon EOS 60D.

儚い光

2012年も折り返し地点を過ぎました。時の流れは止まることを知らず、私はその流れに身を任せる以外の術を持ち合わせていません。人生の長さに比例するほど長く感じる舞台上の2時間も、たった5秒の場面転換のように感じる昼と夜の繰り返しの毎日も、私という意識とは無関係の大きな力が、正確なタイミングで「今」を「過去」へと運びます。「あの頃に戻りたい」と不可能な願いを抱くことはもうなくなりましたが、「今この時が止まってくれたらいいのに」という気持ちにさせられる瞬間に出会うことを止めるとはできません 。

「今」という時間を未来に持って行くための一つの方法が写真です。そして私が写真を勉強する上で一番に知りたかったことは「ストロボ」でした。もちろん舞台でも映画でもそしてテレビでも演出効果の一つとしてストロボを使いますが、写真家はストロボだけを使用して場面を構成することが稀ではありません。ストロボのチャージ時間の限界よりも速い、1秒間に10フレーム撮影することが要求される場合などでは、HMIなど、高照度で高色温度の連続光を供給することが不可欠となります。その他、幅広い用途で写真家にストロボが選ばれ続けるのはなぜでしょうか。

カメラの中で画像をフィルムに焼く瞬間、フィルムのISO感度、露出時間、そして絞り値により多くの組み合わせが生まれ、その組み合わせにより写真の仕上がりが大きく変化します。場面の瞬間をとらえるという目的で写真を撮る場合、一つの方法は露出時間の調整、もう一つがストロボです。ストロボの光は1000分の1秒で点灯消灯し、カメラの露出時間に関わらず、フィルムはストロボが点灯消灯する1000分の1秒の瞬間をとらえます。したがって、ストロボだけを使用した照明設計ではストロボが見せた瞬間のみがフィルムに焼かれ、また環境光とストロボを併せ1000分の1秒より遅い露出時間で撮影する場合では、環境光が見せた露出時間内の被写体の動きとストロボが見せた1000分の1秒の表情が写真として残ります。

いつか終わりを迎える人生だからこそ、今生きているこの瞬間はとても儚く、その儚さは満開の花のような美しさを持ち合わせています。写真照明技術のフラッシュは、儚さをフィルムに焼くことのできる光だと知りました。